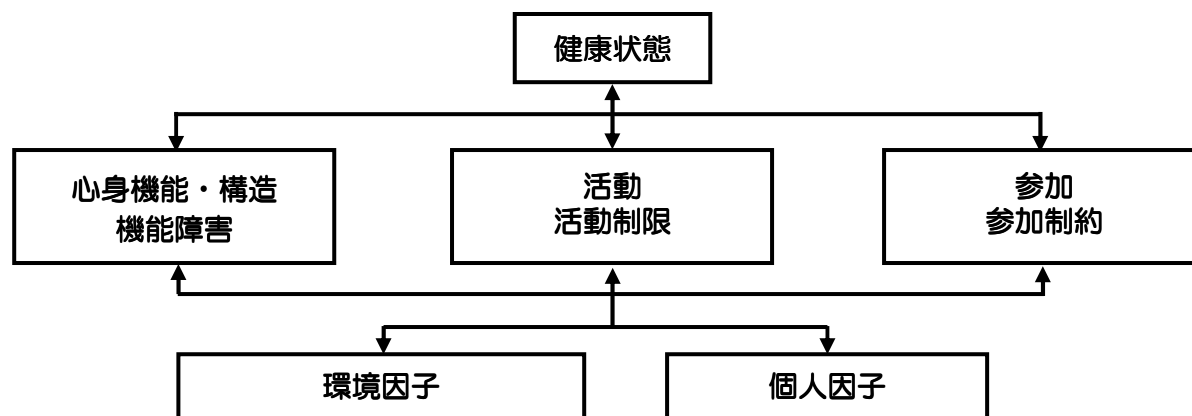


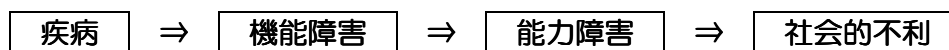
「ICF（国際生活機能分類）」ってなんだ？

「ICF」とは、International Classification of Functioning, Disability and Health（国際生活機能分類）の略で、WHO（世界保健機関）で1980年に制定された「ICIDH（International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps・国際障害分類）」の改訂版です。

「ICF」は2001年に制定され、正式名称は「生活機能・障害・健康の国際分類」といいます。障害に関することや、健康に関することなどを、約1,500の項目（正確には1424項目）に分類し、それらが下の図のように複雑に絡み合って相互作用していると考えたものです。また、子ども向けのICFとして、ICF version for Children and Youth（ICF-CY, 児童青年期版（仮訳））がWHOの関係会議で2006年に承認されています。



1980年に提案されたICIDHの考え方は、



のように、社会的不利（生活しにくさなど）は、本人に疾病（障害など）があることが原因で発生するという一方向のものでした。

例えば、脳性まひ（疾病）で下肢が使えず、車椅子を使用している人がエレベーターのない駅を利用できない（社会的不利）とき、「社会的不利は疾病が原因」と考えます。

しかし、みなさんはこの考えに違和感を覚えるはずです。確かに脳性まひという「疾病」が原因かもしれませんが、エレベーターがあったり、駅員さんが手を貸してくれば、駅を利用することができます。

その「〇〇があれば、△△ができる」というような考え方をいろいろな角度から取り入れたのが、「ICF」なのです。

上図で比較しながら、先ほどの例を考えてみましょう。

脳性まひ（健康状態）で下肢が使えない状況があっても、エレベーターの設置、駅員さんや周囲の方の支援（環境因子）などが整えば、駅の利用（参加）が可能になります。

つまり、ICIDHは「疾病」「機能障害」「能力障害」「社会的不利」と一方通行的な考え方を取りますが、ICFは「心身機能・構造」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」それぞれが相互に影響し合っていると考えなのです。

さて、ICFには6つの「単語」が出てきます。「健康状態」「心身機能・構造」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」です。それぞれが何を示すのか見ていきましょう。

- ①「健康状態」…疾病や体の変調、怪我、妊娠、高齢、ストレスなど様々なものを含む広い概念となっています。「疾病」だけでなく、私たちが普段から関係するような心身の状態まで含まれているのです。「ADHD」「脳性まひ」「低酸素脳症」「自閉症」などの症状名は、ここに含まれます。
- ②「心身機能・構造」…「心身機能」の問題、「身体構造」の問題を指します。感覚の特徴や、体の

構造（腕が曲がらないとか）などを指します。

- ③「活動」…「活動」とは「行動」を指します。本人が実際に行っている「している行動」、本人が能力的にできそうな行動である「できる行動」にわかれます。
- ④「参加」…「参加」は簡単にいうと、社会的参加です。実社会への参加、学校への参加、学級への参加、家庭への参加…とたくさん本人が「参加」している場面は考えられます。
- ⑤「環境因子」…「物的環境（例えば…道路の構造、階段や段差、建物の構造、交通機関、車いすなどの福祉機器など）」「人的環境（例えば…家族、教師、友人、まわりの人々の障害者に対する意識など）」「制度的な環境（自立支援法などの法律、医療や介護などのサービスなど）」にわけることができます。これら環境によって、「障害」そのものの捉え方が大きく左右されます。
- ⑥「個人因子」…その人の「個性」と考えていいでしょう。例えば、年齢、性別、民族、生活歴、価値観、ライフスタイル、興味関心などです。

「ICF」は、

- ・児童生徒の実態を多角的に把握することができ、目標設定や評価に生かすことができる。
- ・児童生徒の実態を教師のみならず、保護者も、施設・サービス関係者も、医療関係者も、共通して理解することが容易になる。（共通言語的役割）

など活用する方法はさまざまです。

次回は、ICF モデルを用いて、児童生徒の実態を把握したり、支援方法を模索したりする方法を書きたいと思います。

前回の支援部だよりでは、ICF の基本的な考え方の紹介をさせていただきました。今回は、ICF を使うことでどんな考え方ができるのか、具体的な事例を元にお話していきたいと思います。

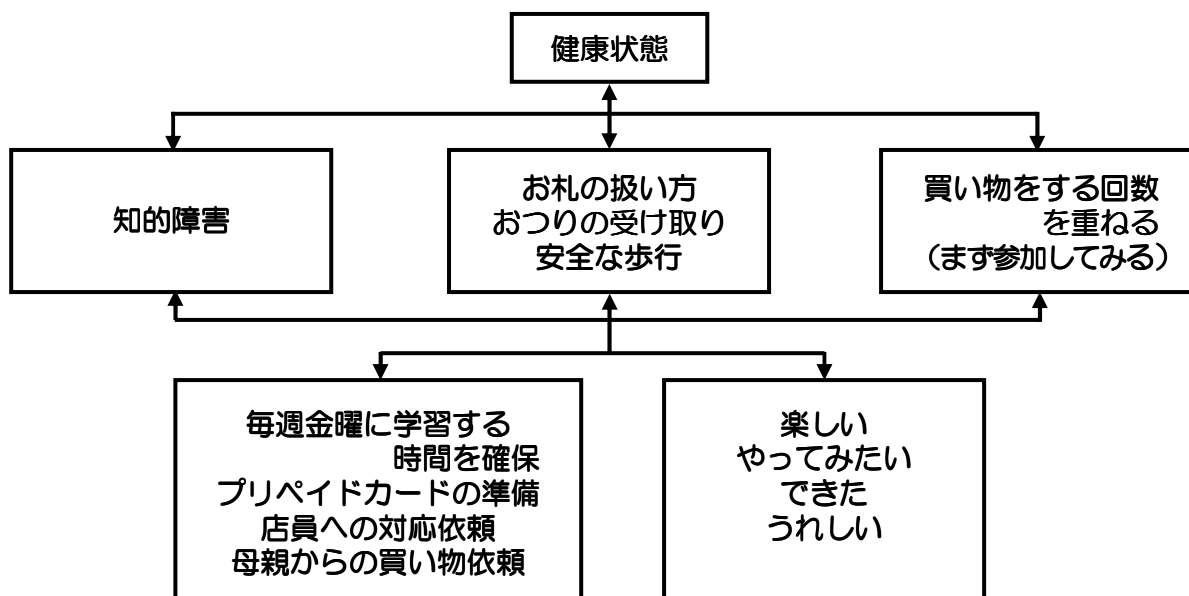
ひとつめの事例は、「知的障害の子どもの買い物学習」についてです。買い物学習が難しい原因をお金の弁別と歩行の難しさの結果と考え、支援を考えました。

ICIDHの考え方でいくと、

機能障害	⇒	能力障害	⇒	社会的不利
知的障害		お金の弁別の難しさ		買い物の難しさ
		安全な歩行の難しさ		

と理解することができます。そこで考えられる支援は、能力障害の部分に対して、「授業等でお金の学習を繰り返し行う」ことや「交通に気をつけ、学校近隣のお店で買い物してくる学習を行う」ことなどが考えられます。このようなICIDHモデルの視点に基づいた理解と支援も悪くはないと思われます。

では、ICFの考え方でいくとどうなるでしょうか。



例えば、「楽しい」「やってみたい」「できた」「うれしい」などの本人の気持ちを大切に、実際に買い物活動をする活動を活動の中心に据えてみます。お金の弁別など個人的にできないことがあっても、まずは社会参加してみようという考え方です。

そのためにいろいろな学習環境を整えます。例えば、校外へ出て行く時間を確保し、事前にお店の方に対応をお願いし、母親には金曜の夕飯の材料の買い物をお願いしてもらうようにします。

こうして、実際に買い物を続けていくうちに、人とのやり取りが苦手な場合でも、お札を出して買い物ができる喜びを味わい、買い物の場所までなら注意しながら歩行できるようになって来ることもあるでしょう。

社会参加を繰り返すうちに、苦手とされていた活動（お金の弁別・歩行）も向上することを狙いとしています。

これは、暮らしにくさや困った状況（＝障害がある状況）を本人の障害や機能障害だけ原因があるとせず、本人を取り囲む人的・物的環境を整え、本人の主体性・主観性（＝気持ち）に配慮し、マイナス面よりもプラス面を見ながら、「心身機能」だけでなく、「活動」「参加」に着眼するという、ICFの視点に基づいた支援の考え方と言えます。

次回は、ICFの元になる考え方やその変遷、さらには周辺情報に触れたいと思います。

参考文献等

- 「ICF の理解と活用」 きょうされん
- 「ICF活用の取り組み」 ジアース教育新社
- 「ICF及びICF-CYの活用 ～試みから実践へ～」 ジアース教育新社
- 「ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－」 中央法規
- 「ICF イラストライブラリー」